

玉里文庫本『古筆源氏物語』「若菜下」卷・第四一〜八〇丁の翻刻と考察

武藤 那賀子・富澤 萌未

はじめに

翻刻と考察

鹿児島大学附属図書館が所蔵する玉里文庫本の古筆源氏物語^一は、鎌倉時代から南北朝時代に書写されたものと考えられている、全一五帖〔空蟬〕「花宴」〔賢木〕「須磨」〔関屋〕「絵合」〔松風〕「玉鬘」〔初音〕「野分」〔藤裏葉〕「若菜下」〔夕霧〕「匂宮」〔紅梅〕の取り合わせ本である。当該本については、徳光澄雄が書誌および本文の傾向を調査し^二、伊藤鉄也が画像をサイトに掲載している^三。しかし、徳光論の書誌に疑問点があったため、拙稿二本において書誌情を再調査した^四。

本稿では、古筆源氏物語の「若菜下」巻を取り上げる。当該本は、徳光論および拙稿において他の巻と寸法が違うことが確認できており、元々は他の帖とは別の揃であった可能性が高い。また、多くの丁において、墨が乾ききる前に丁を閉じたために起きたと考えられる文字写りが生じているという特徴がある。このような当該本を、以下、四一〜八〇丁の翻刻を行なった上で^五定家本系の大島本と比較し、異同のある箇所が他のどの本文に近いのかをみていく^六。その過程で、特異な本文があった場合には考察を加えた。

【凡例】

- 一 改行箇所や和歌の書式は原本のままとし、丁数とその表裏、行数を付記した。
- 一 原本に用いられている変体仮名は、すべて現行の平仮名に統一した。ただし、原本の平仮名中に片仮名を混用した箇所は、片仮名を平仮名に改めた。
- 一 ミセケチは、現状では文字に二本線を引いている。このため翻刻では、ミセケチを、取り消し線で示した。
- 一 傍記は、該当する文字の横にそのまま示した。
- 一 補入記号のない補入は――で示し、補入記号のある補入は〈 〉で示した。
- 一 虫食い等の欠損により、読み取り辛い文字は□で示した。
- 一 各丁の翻刻の後に載せた異同は、当該本と一致するものがある場合にはその諸本を漢字一字で示した。このとき、定家本系、河内本系、別本全てが一致する場合には、それぞれ定河同と

キーワード…玉里文庫本、源氏物語、若菜下巻

のみ示した^七。定家本系、河内本系の中の何本かが一致する場合
には、それぞれの系統の文字を示した後に一致する諸本を漢字
一字で示す。また、一致するものがない場合には「ナシ」とし、
近い本文があつた場合、その本文を「参考」に掲げ、必要に
応じて考察を示した。

【翻刻】

四二丁オモテ(画三〇六左)(大一一四七)

- 1 いゑくゝのさるへき人のつたへとも^①を^②の
- 2 こそす心みしなかにいとふかくはつ
- 3 かしきかなとおほゆるきはの人名む
- 4 なかりしそのかみよりも又このこ
- 5 ろのわかき人くゝのされよしめきすく
- 6 すに^②ははたあさくなりたるへし
- 7 きむはたましてさらにまねふ人
- 8 なくなりたりとかこの御ことの
- 9 ねはかりたにつたえたる人おさくゝあら

①定陽別阿

【参考】定大「、」定横榊池肖三画「をも」別保ナシ

②ナシ 【参考】諸本ナシ

四二丁ウラ(画三〇七右)(大一一四七、一一四八)

- 1 しとの給えはなに心なくうちゑみ

- 2 てうれしくかくゆるし給程にな
- 3 りにけるとおほす二十一二はかりに
- 4 なり給えとなをいとみしくかたな
- 5 りにきひ^本わなる心ちしてほそく
- 6 あえかにうつしくのみみえ給ふ
- 7 院にもみへたてまつり給はて年
- 8 へぬるをねひまさり給にけりと御
- 9 覧するはかり^①によういくわへてみへ

①ナシ 【参考】諸本ナシ

四二丁オモテ(画三〇七左)(大一一四八)

- 1 たてまつり^①給えるに事におれて
- 2 をしへきこへ^②たまひけりかゝる御
- 3 うしろみなくてはましていはけ
- 4 なくおはします御ありさまかくれ
- 5 なからましと^③人くゝみたてまつる正月
- 6 廿日^④のひはかりになれはそらもをか
- 7 しき程に風ぬるくふきて御前
- 8 の梅もさかりになり行おほかたの
- 9 花の木^⑤すゑとも、みなけしきはみ

①ナシ

【参考】別阿「給へなど」他諸本「たまへと」

この箇所は、諸本では源氏から女三の宮への台詞となっているが、玉里文庫本では源氏の心内語となっている。玉里文庫本を現代語訳するならば、次のようになろう。

「(女三宮は)朱雀院にもお目にかからないまま長年経っているの
で成長してしまった」と源氏をご覧になるにつけ、殊更に準備を
して朱雀院にお見せ申し上げなされるために何かにつけて教えなさ
る。

②ナシ

〔参考〕**定三**阿「給に」他諸本「給ふけに」

③**定**横柿池

〔参考〕他諸本「人くも」

④ナシ 〔参考〕他諸本ナシ

⑤ナシ 〔参考〕他諸本ナシ

四三丁ウラ(画三〇八右)(六一一四八)

- 1 かすみわたりにけり月たゝは御いそ
- 2 きちかくものさはかしからむにかきあは
- 3 せ給はむ御ことのねもしかく^①めきて
- 4 いひなさむをこのころしつかなる
- 5 ほとに心み給えとてしむてむ^②へわた
- 6 したてまつり給御ともに我もく
- 7 とものゆかしかりてまうのほらま
- 8 ほしかれとこなたにとをきをはえ
- 9 りとゝめさせ給てすこしねひた

①**定**陽阿 〔参考〕他諸本「めきて人」

②**剛**阿 〔参考〕他諸本「に」
傍記で示された「このかた」という本文は現在確認できる諸本には
ない。

四三丁オモテ(画三〇八左)(六一一四八)

- 1 れとよしあるかきりえりてさふら
- 2 はせ給わらはへはかたちすくれた
- 3 る四人あか色にさくらのかさみうす
- 4 色のをりものゝあこめうきもむの
- 5 うゑのはかまくれなるのうちたる
- 6 さまざまなしすくれたるかきりを
- 7 めしたり女御の御方にも御しつ
- 8 らひなといとゝあらたまれる^①心のく
- 9 もりなきにおのくいとましくつ

①ナシ

〔参考〕**因**池「心」他諸本「ころ」

諸本のほうに「ころ」ではなく「心」とすると、明石女御に仕えて
いる女房たちの心に寄り添った表現になっている。

四三丁ウラ(画三〇九右)(大一一四八〜一一四九)

- 1 くしたるよそいともあへさ^①やかににな
- 2 しわらは、あをいろにすわうのか
- 3 さみからあやのうゑのはかまあこめ
- 4 はやまふきなるからの^①きぬををな
- 5 しさまにと、のへたりあかしの
- 6 御方のはことくしからて紅梅ふたり
- 7 桜ふたりあをしのかきりにてあ^本
- 8 こめこくうすくうちめなとえなら
- 9 てきせ給えり^{※②}あをに、やなきのか^本

①剛阿 「参考」他諸本「き」

②定大神陽肖河 剛保

「参考」^①定横三「あをきに」^②定池「あをへき」に^③剛阿「あをにひ」
 ※この箇所は「宮の御方にもかくつとひたまふへくき、給てわらはへのすかたはかりはことにつくろはせたまへり」が抜けている。「たまへり」で目移りした故であろう。

四四丁オモテ(画三〇九左)(大一一四九)

- 1 さみえひそめのあこめなとことこ
- 2 のましくめつらしきさま^①にあら
- 3 ねとおほかたのけはひのいかめしくけ
- 4 たかき事さへいとならひなしひさ
- 5 しのなかの御しやうしをはなちて

6 こなたかなた御几帳はかりをけちめ

7 にて中のまは^②院をはしますへきお

8 ましよそひたりけふのひやうし

9 あはせにはわらはへをめさむとて

①ナシ 「参考」諸本「には」

②定陽 「参考」他諸本「院の」

四四丁ウラ(画三〇九右)(大一一四九)

- 1 みきのおほあとののさふらふかむの
- 2 君の御はらの^①あにさうのふゑ^②右大将
- 3 御たらうよこふゑとふかせてすの
- 4 こにさふらはせ給うちには御しとね
- 5 ともならへて御こと、もまいりわた
- 6 すひし給ふ御こと、もうるはしき
- 7 こむちのふくろともにいれたるとり
- 8 いて、あかしの御方^③にひは^④むらさき
- 9 のうゑわこむ女御の君にしやうの御

①ナシ 「参考」諸本「あに君」

②定陽河 御七宮尾平鳳国

「参考」^①定大横神池肖三^②河大圓「左大将」

この箇所、「左大将」は夕霧となるが、右大将は不明。

③定横神池陽肖三河

〔参考〕定大阿「には」

④ 河阿

〔参考〕定横神池陽肖三「に」定大「には」

四五丁オモテ(画三二〇左)(大一一四九～一一五〇)

- 1 こと宮にはかくことくしき事は
- 2 また^①えきへ給はすやとあやうくて
- 3 れいのてならし給えるをそしらへ
- 4 てたてまつり給さうの御ことは
- 5 ゆるふとなけれとなをかくものには
- 6 するおりのしらへにつけてことち
- 7 のたちとみたる、ものなりよくそ
- 8 の心しらひと、のふへきををむなは
- 9 えはりしつめしなを大将をこそ

① ナシ

〔参考〕定大横池肖三河阿保「えひきたまはすや」定神「えひきた
まはすや」定陽「ひき給はすや」河阿「ひきしつめ」

四五丁ウラ(画三二一右)(大一一五〇)

- 1 めしよせつへかむめれこのふゑふき
- 2 ともまたいとをさなけにてひやうし
- 3 と、のえむたのみつよからすとわらひ

4 給て大将こなたにとめせは御かたく

5 はつかしく心つかひしてをはずあ

6 かしの君をはなちてはいつれもみな

7 すてかたき御てしともなれは御心く

8 わへて^①大将き、給はむになむなかるへ

9 くとおほす女御はつねにうゑのき

① 定陽河阿 「参考」他諸本「大将の」

四六丁オモテ(画三二一左)(大一一五〇)

- 1 こしめす^①ものにはせつ、ひきな
- 2 らし^②給えれはうしろやすきを
- 3 わこむこそいくはくならぬしらへな
- 4 れ^③ともあとさたまりたる事なく
- 5 て中く女のたとりぬへけれ春のこと
- 6 のねはみな^④かきあはせたるものな
- 7 るをみたる、事もやとなまいとを
- 8 しくおほす大将いといたく心けさ
- 9 うして御まへのことくしくうるは

① ナシ 「参考」諸本「にもものに」

② 定横神池陽肖三河阿保

〔参考〕定大阿「給ひつれば」

③ ナシ 「参考」諸本「と」

④ナシ 「参考」 諸本「かきあはする」

四六丁ウラ(画三二二右)(大一一五〇)

- 1 しき御心みあらむよりもけふの
- 2 心つかひはことにまさりておほえ給え
- 3 はあさやかなる御なをしかうにし
- 4 みたる御そとも袖いたくたきし
- 5 めてひきつくろひてまいり給ふ
- 6 程くれはて^①けりゆえあるたそかれ
- 7 時のそらに花はこそそのふるゆき
- 8 おもひいてられゑたもたわむはかり
- 9 さきみたれたりゆるらかにうちふく

①ナシ 「参考」 諸本「にけり」。

②ナシ 「参考」 諸本「おもひいてられて」

四七丁オモテ(画三二二左)(大一一五〇〜一一五二)

- 1 風にえならすにほひたるみすのう
- 2 ちのかほりもふきあはせてうくひ
- 3 すさそふつまにしつへくいみしき
- 4 おとゝのあたりのにほひなりみすの
- 5 したよりさうの御ことのすそす
- 6 こしさいいてゝ^①かろくしきやうなれ

- 7 とこれかをとゝのへてしらへ心みたま
- 8 へこゝに又うとき人のいるへきやう^②は
- 9 なきをとの給えはうちかしこまり

①定横榊池

「参考」 他諸本「かるくしき」

②定横陽

「参考」 定三「^は」他諸本「も」

四七丁ウラ(画三二三右)(大一一五二)

- 1 てたまはり給程よういおほくめ
- 2 やすくていちこつてうのこゑに^①は
- 3 八のをゝたてゝふともしらへやら
- 4 てさふら^③へ給えはなをかきあはせ
- 5 はかりはてひとつすさましから
- 6 て^④の給えはさらにつけふの^ゆ
- 7 御あそひのさしいらへにましらふは
- 8 かりのてつかひなむおほえす侍
- 9 りけるとけしきはみ給さもある

①ナシ 「参考」 諸本ナシ

②別「八のを」 定池陽肖三画「はちのを」

「参考」 定大「はつのを」 定横「はちを」 定榊「^はいちのを」

③ナシ 「参考」 諸本「ひ」

④ナシ 「参考」諸本「こそと」

四八丁オモテ（画三二三左）（大一一五二）

- 1 事なれと女かくにえことませてな
- 2 むにけにけるとつたはらむ名こそ
- 3 をしけれとてわらひ給しらは
- 4 て、をかしき程にかきあはせはかり
- 5 ひきてまいらせ給つこの御むま^①
- 6 の君たちいとうつくしきとのゑ
- 7 すかたともにてふきあはせたる
- 8 もの、ねともまたわかへけれとをいさき
- 9 ありていみしくをかしけなり御

①ナシ 「参考」諸本「御むまこの君たちの」

四八丁ウラ（画三二四右）（大一一五二～一一五二）

- 1 こと、ものしらへとも^①と、のへはて、
- 2 かきあはせ給える程いつれとなきな
- 3 かにひは、すくれて上すめきかみさ
- 4 ひたるてつかひすみはて、おもし
- 5 ろくきこゆわこむに大將もみ、と、
- 6 め給えるになつかしくあいきやう
- 7 つきたる御つまをとにかきかへし

- 8 たるねのなつかしういまめきて
- 9 さらにこのわさとある上すとものおと

①剛阿 「参考」他諸本「と、のひ」

②ナシ 「参考」諸本「めつらしく」

四九丁オモテ（画三二四左）（大一一五二）

- 1 ろくしくかきたてたるしらへてう
- 2 しにおとらすにきはしくやま
- 3 とことにもかゝるてありけりとき、を
- 4 ところなるふかき^①御ごうの程あらはに
- 5 きこへておもしろきにおと、御心をち
- 6 めていとありかたくおもひきこへ給ふ
- 7 さうの御ことはもの、ひまゝに心もと
- 8 なくもりいつるもの、ねからにてう
- 9 つくしけになまめかしくのみきこゆ

①ナシ 「参考」諸本「御らう」

この箇所、「御らう」は「御勞」となり、玉里文庫本の「御ごう」は「御功」となる。意味に違いはない。

四九丁ウラ（画三二五右）（大一一五二）

- 1 きむはなをわかきかたなれとなら

2 ひ給さかりなれはたとくしからす
 3 いとよくものにひ、きあひていふに
 4 なりにける御ことのねかなと大將き、
 5 給ひやうしとりてさうかし給院
 6 も時くあふきうちならしてくはへ
 7 たまふ御こゑむかしよりもいみし
 8 くおもしろくすこしふつ、かに
 9 ものくしきけそひてきこゆ大將も

五〇丁オモテ (画三二五左) (大一一五二)

1 こゑいとすくれ給える人にてよのし
 2 つかになりゆくま、にいふかきり
 3 なくなつかしきよの御あそひな
 4 り月心もとなきころなれはとうろ
 5 こなたかなたにかけて火よき程に
 6 ともさせ給えり宮の御かたをのそ
 7 き給えれは人よりけにちゑさく
 8 うつくしけにてた、御そのみ
 9 ある心ちすにほひやかなるかたはお

五〇丁ウラ (画三二六右) (大一一五二、一一五三)

1 くれてた、いとあてやかにをかし
 2 く二月の中の十日はかりのあをや

3 きのわつかにしたり^①はしめたる
 4 心ちしてうくひすのはかせにも
 5 みたれぬへくあえかにもへ給さくらの
 6 ほそなかに御くしはひとりみき
 7 よりこほれか、りてやなきのいとの
 8 さましたりこれこそはかきりな
 9 き人の^②御さまなめれとみゆるに女御

① ナシ

〔参考〕^①定陽「はしめらむ」^②別阿「そめやさしくこたれる」

他諸本「はしめたらむ」

② 定陽、定池「御あさま」

〔参考〕他諸本「御ありさま」

五二丁オモテ (画三二六左) (大一一五三)

1 の君はおなしやうなる^①御なまめき
 2 すかたいますこしにほひくわはりて
 3 もてなしけはひ心にく、よしある
 4 さまし給てよくさきこほれたる
 5 ふちのはなの夏にか、りてかたはら
 6 にならふはな、きあさほらけの心
 7 ち(そ)し給えるさるはいとふくらかなる
 8 程になり給てなやましくおほえ
 9 給ければ御こともをしやりてけ

①ナシ 「参考」諸本「御なまめきすかたの」

五二丁ウラ (画三二七右) (大一一五三)

- 1 うそくに^①をしか、りさ、やかにな
- 2 よひか、り給えるに御けうそくは
- 3 れいの程なれはおよひたる心ちし
- 4 て^②ことさらちあさくつくらはやとみ
- 5 ゆるそいとあはれけにおはしける
- 6 紅梅の御そに御くしのか、りはらく
- 7 ときよらにてほかけの御すかたよに
- 8 なくうつくしけなるにむらさきの
- 9 うゑはゑひそめにやあらむ色こ

①ナシ

「参考」^①定横池「をしか、り給へる」^②阿「をしか、りより給へ

る」その他諸本「をしか、り給へり」

②ナシ 「参考」諸本「ことさらに」

五二丁オモテ (画三二七左) (大一一五三～一一五四)

- 1 きこうちさうす、わうのほそなか
- 2 に御くしのたまれるほとこちたく
- 3 ^①ゆる、かにおほきさなとよきほと

4 にやうたいあらまほしく^②あたりに

5 ほひみちたる心ちしてはなといは、

6 さくらにたとへてもなをものより

7 すくれたるけはひことにものし給

8 か、る御あたりにあかしはけをさるへ

9 きをいとさしもあらずもてなしなど

①定横池榊陽肖

「参考」^①定大三河^②「ゆるらかに」

②定横池河御七宮尾大鳳^③

「参考」^①定大榊陽肖三「あたりに」^②河平国ナシ

五二丁ウラ (画三二八右) (大一一五四)

- 1 けしきはみ^①はつかしう心のそ
- 2 こゆかしきさましてそこはかとなく
- 3 あてになまめかしくみゆやなきの
- 4 をりものの^②ほそなかもえきにやあ
- 5 らむこうちき、てうすもの、物はか
- 6 なけなるひきかけてことさらひけ
- 7 したれとけはひおもひなしも心
- 8 にく、あなつらはしからすこまの
- 9 あをちのにしきのはしさしたる

①ナシ 「参考」諸本「はつかしく」

② 定横榊池肖三別阿

〔参考〕 定大河別保「ほそなかに」

五三丁オモテ (画三一八左) (大一一五四)

- 1 しとねに^①まうにもゐてひはをうちを
- 2 きてた、けしきはかりひきかけ
- 3 てたをやかにつかひなしたるはち
- 4 のもてなしねをきくよりもまた
- 5 ありかたくなつかしくて五月まつ
- 6 ^②はなたちはなもみもくしておし
- 7 をれるかほり^③おほゆるこれもかれも
- 8 うちとけぬ御けはひとをも^④み給に
- 9 大将もいと^⑤うちゆかしうおほえ給たい

① ナシ

〔参考〕 定榊三「まをにも」他諸本「まほにも」

② 河宮

〔参考〕 定大肖河七別保「はなたちはなのはなも」 定横榊池陽三河
御尾平大鳳国別阿「はなたちはなはなも」

③ 河七

〔参考〕 定別「おほゆ」 河宮尾平鳳国「おほ、ゆ」

④ ナシ

〔参考〕 定池「き、み給に」 定陽河大「き、給に」その他諸本「き、
み給に」

⑤ ナシ

〔参考〕 別保「うちゆ、かしく」その他諸本「うちゆかしく」

五三丁ウラ (画三一九右) (大一一五四)

- 1 のうゑのみしをりよりもねひま
- 2 さり^①給らむありさまゆかしきにし
- 3 つ心もなし宮をはいますこしの
- 4 すくせをよはましかはわかものに
- 5 てもみたてまつりてまし心のい
- 6 とぬるきそ^②くちをしきや院は
- 7 たひくさやうにおもむけてしり
- 8 うことにも給せけるをとねたく
- 9 おもえとすこし心やすき^③かたにもみ

① 河御七

〔参考〕 定別保「たまへらむ」 河宮尾平大鳳国別阿「給ひつらむ」

② ナシ

〔参考〕 定大横陽肖河「くやしきや」 定榊「くやしき」 定池「くち
をしや」 定三「いとくやしきや」 別阿「くやしくそ」 別保
ナシ

③ ナシ

〔参考〕 諸本「かたに」

五四丁オモテ(画三一九左)(大一一五四～一一五五)

- 1 え給御けはひにあなつりきこゆとは
- 2 なけれといとしも心はうこかさりけ
- 3 りこの御かたをは何事もおもひをよ
- 4 ふへきかたなく^①けとをく年ころ
- 5 すきぬれはいかてかた、おほかたに
- 6 ^②心をよせあるさまをもみえたてまつ
- 7 らむにと^③はかりくちをしくなけ
- 8 かしきなりけり^④あななちにおほ
- 9 けなき^⑤心などはさらにももし給はず

①ナシ 「参考」諸本「けとをくて」

②ナシ 「参考」諸本「心」

③ナシ 「参考」諸本「はかりの」

④別阿。なお、**定禰**「あななちに〈あるましく〉」

「参考」その他諸本「あななちにあるましく」

⑤**定横**榊池陽三**河**御七宮尾平鳳**国**別。なお、**定背**「心など〈は〉」

「参考」**定大**「心ちなとは」**河大**「心とは」

五四丁ウラ(画三二〇右)(大一一五五)

- 1 いとよくもてをさめ給えり夜ふけ
- 2 ゆくけはひ、や、かなりふしまち
- 3 の月^①わつかにさしいてたる心もとな
- 4 しや春の^②おほる月よ秋のあはれ

5 はた^③かやうなるもの、ねにむしのこゑ

6 よりあはせたるた、ならすこよなく

7 ひ、きそふ心ちすかしとの給へは大

8 将の君秋の夜のくまなき月には

9 よろつもの、と、こほりなきにことふ

①ナシ 「参考」諸本「はつかに」

②ナシ

「参考」**定大**横榊陽三**河**御宮尾平大鳳**国**保「おほる月よ、」**定池**

河七国別阿「おほる月夜に」

玉里文庫本では、「朧月夜」なのか「朧月よ」と詠嘆なのか不明である。

③**定横**池

「参考」その他諸本「かうやうなる」

五五丁オモテ(画三二〇左)(大一一五五)

- 1 ゑのねもあきらかにすめる心ち
- 2 はし侍となをことさらにつくりあは
- 3 せたるやうなるそらのけしき^①花
- 4 の露も色くめうつろひ心ちりて
- 5 かきりこそ侍れ春のそらのたとく
- 6 しきかすみのまよりおほるなる
- 7 月かけにしつかにふきあはせたる
- 8 やうにはいかてかふゑのねなともえむに

9 すみのほりはてすなむ※／女ははるをあ

①定横神池陽肖三河別阿

〔参考〕定大「花のつゆにへも」なお、補入された「も」は朱墨。

別保「花のつゆにも」

※九行目の「／」は合点か。

五五丁ウラ (画三二二右) (大一一五五く一一五六)

- 1 はれふとふるき人のいひをき侍
- 2 りけるけにさなむ侍りけるなつ
- 3 かしくもの、^①と、のふる事は春
- 4 のゆふくれこそことに侍りけれ
- 5 と申給へはいなこのさためよいに
- 6 しへより人のわきかねたる事
- 7 をすゑのよにくたれる人の^②えあきを
- 8 らめはつましようこそもの、しらへ
- 9 こくのものともはしもけにりち

①ナシ

〔参考〕定大横神陽肖三河別阿「と、のほる」定神「と、へと」のほる
定池「へね」と、のおる」

②ナシ。なお、定横池陽肖三河御七宮尾平鳳国「えあきらめはつましく」
定神「へえ」あきらめ

〔参考〕定大「えへあ」きらめははつましく」定神「へえ」あきらめ

はつましく」河大「あきらめはつましく」別保「あきらめ
はつまし」別阿「あきらめわくまじき」

五六丁オモテ (画三二二左) (大一一五六)

- 1 をはつきのものに^①したるさも^②あり
- 2 しかなとの給ていかにた、いま^③い
- 3 うそくのおほえたかきその人か
- 4 の人御せむなどにて^④たいく心みさ
- 5 せ給にすくれたるはかす^⑤すくな
- 6 くなりたむめるを^⑥そのかみと思
- 7 える上すともいくはくえまねひとら
- 8 ぬにやあらむこの^⑦かくほのかなる女た
- 9 ちの御中にひきませたらむにきは、

①定陽 「参考」その他諸本「したるは」

②別阿

〔参考〕定河御七宮尾大鳳別保「ありかし」

河平国「あるかし」

③定横神池陽肖三河別保

〔参考〕定大「いうそく」別阿「いうそくと」

④ナシ 「参考」諸本「たひく」

⑤定横池陽別保

〔参考〕定大神肖三河「すくなくなりためる」別阿「すくなくなり
にたるめる」

⑥河

〔参考〕定大榊池肖三画「そのこのかみと」定横「このみと」定陽「このかみ」

⑦定横榊池陽肖三画別保

〔参考〕定天ナシ、別阿「かた」

五六丁ウラ (画三三三右) (大一一五六)

- 1 なるへくこそおほえね年ころかく
- 2 むもれてすすすにみ、なともすこ
- 3 しひかくしくなりたるにやあら
- 4 む^①くちをしくなむあやしく人の
- 5 さへはかなくとりする事とも、もの
- 6 のはへありてまさる所なるその
- 7 御まえの御あそひなどにひときさ
- 8 みにえらはる、人くそれかれといか
- 9 にそとの給えは大将それをなむと

①定榊池三

〔参考〕定大河画「くちおしう」

五七丁オモテ (画三三三左) (大一一五六)

- 1 り申さむとおもひ侍りつれとあき
- 2 らかならぬ心のま、におよすけ

- 3 てやはとおもひ給ふるのほりての世
- 4 をき、あはせ侍らねはにや衛門の
- 5 督のわこむ兵部卿の宮の御ひは
- 6 なとをこそこのころ^①めつらしかる
- 7 ためしにひきいて侍るめれけ
- 8 にかたわらなきをこよひうけ給は
- 9 るもの、ねとものみなひとしくみ、

①ナシ

〔参考〕定河「めつらかなる」別「めつらしき」

五七丁ウラ (画三三三右) (大一一五六～一一五七)

- 1 をとろき侍はなをかくわさともあ
- 2 らぬ御あそひとかねておもひ給へ
- 3 たゆみける心のさはくにや侍らむ
- 4 さうかなといとつかうまつりにく、
- 5 なむわこむはかのおと、はかりこそ
- 6 かくをりにつけてこしらへなひか
- 7 したるねなど心にまかせてかきたて
- 8 給えるはいとことにも^①のし^①給えり
- 9 おさくきは、なれぬものに^②侍るめ

①ナシ

〔参考〕定河別保「給へ」別阿「給を」

② 定神

〔参考〕定大陽肖河御七宮尾平大鳳「侍へめるを」定横池三「はへめるを」河国「はへるを」河「はへる」

なり、意味が通らなくなる。ただし、「聞き始めぬ。世に珍しき」とすると、「ぬ」は完了となるため、文は切れるが、他諸本と意味は同じとなる。そのため、後者の解釈が良いか。

五八丁オモテ (画三三三左) (大一一五七)

- 1 るをいとかしこくと、のひてこそ
- 2 侍つれとめてきこへ給^①いとさまてこ
- 3 とくしき、はにはあらぬをわさと
- 4 うるはしくもとりなざる、かなとて
- 5 したりかほにほ、ゑみ給けにけし
- 6 うはあらぬてしともなりかしひは
- 7 はしもこ、にくちいるへき事^②もま
- 8 しらぬをさいえともの、けはひこと
- 9 なるへしおほえぬところにて^③き、はし

五八丁ウラ (画三三四右) (大一一五七)

- 1 めぬよにめつらしきもの、こゑかな
- 2 となむおほえしか^①ともそのをりよ
- 3 りはまたこよなく^②まさりたるをや
- 4 とせめてわれ^③かしこ「かほ」にかこ「ち」なし
- 5 ^④つ、女房などはすこし^⑤つきしろ
- 6 よろつの事道くにつけてなら
- 7 ひまねは、さへといふもの^⑥いつれとも
- 8 なきはなくおほえつ、わか心ちに
- 9 あくへきかきりなくならひとらむ

① ナシ

〔参考〕定大横池神肖河御七尾平大鳳河「いとさ」定陽「いと、

① ナシ 「参考」諸本「と」

② ナシ

② ナシ

〔参考〕河阿「こともしらぬを」他諸本「ことましらぬを」

〔参考〕定河保「まさりにたるをやと」河「まさりにたるをと」河阿「まさりわたるをやと」

③ ナシ

〔参考〕河阿「き、はしめたりし時」その他諸本「き、はしめたりしこ」

③ 補入記号のない補入で「賢顔」となっているが、これと同じ本文は、現時点では他には見いだせない。

玉里文庫本は「聞き始めぬ世に珍しき」とすると、「ぬ」が打消と

④ ナシ 「参考」諸本「給へは」
玉里文庫本は、源氏から敬語表現が抜けるだけではなく、そのまま女房に主語が移行している。

⑤ナシ 「参考」諸本「つきしろふ」

玉里文庫本の「つきしろ」は「ふ」が抜けてしまったか。

⑥ナシ 「参考」諸本「いつれもきはなく」

玉里文庫本では、直前の「さへ」の解釈を「才芸」ではなく「才能」と取るべきか。諸本では、「才芸」というものはどのようなものでも際限がないと自然と分かる」という解釈になるのに対し、玉里文庫本は、「才能」というものはどのようなものであってもないことはないと自然と分かる」という解釈になるであろう。

五九丁オモテ(画三二四左)(大一一五七)

- 1 事はいとかたけれとなにかはその^①た
- 2 ちふかき人のいまのよにおさく^②なけれはかたはしをなたらかに^③まね
- 3 ひえたらむさるかたかとに心をやり
- 4 てもありぬへきをきむなむなを
- 5 わつらはしくてふれにくきものは
- 6 ありけるこの事はまことにあとの
- 7 まゝにたつねとりたるむかしの
- 8 は天地をなひかしをに神の心を
- 9

①ナシ 「参考」**〔定〕**櫛「をとり」その他諸本「たとり」

②ナシ

「参考」**〔定〕**「まねひえたらむ人」**〔同〕**「まねひたらむ」

五九丁ウラ(画三二五右)(大一一五七～一一五八)

- 1 やはらけよろつもの、ねの^①そら
- 2 にしたかひてかなしひふかきもの
- 3 もよろこひにかはり^②いやしうま
- 4 つしきものもたかきよにあら
- 5 たまりたからにあつかりよにゆるさ
- 6 る、たくひおほかりけりこの国に
- 7 ひきつたふるはしめつかたまで
- 8 ふかくこの事を心えたる人はおほ
- 9 くのとしをしらぬ国にすこし

①**〔定〕**陽 「参考」諸本「うち」

②ナシ 「参考」諸本「いやしく」

六〇丁オモテ(画三三五左)(大一一五八)

- 1 身をなきになしてこの事を
- 2 まねひとらむとまとひてたにし
- 3 うるはかたくなむありけるけにはた
- 4 あきらかにそらの月ほしをうこか
- 5 し時ならぬしも雪をふらせ雲
- 6 いかつちをさはかしたるためし
- 7 あかりたるよにはありけりかくか
- 8 きりなきものにてそのまゝになら
- 9 ひとり人の^①ありかたうよのすゑな

①ナシ 「参考」諸本「ありがたく」

六〇丁ウラ (画三三六右) (大一一五八)

- 1 れはにやいつこの^①その神のかた
- 2 はしにかはあらむされとなをか
- 3 のをに神のみ、と、めかたふきそめ
- 4 につける^②にやなま〜にまねひて
- 5 おもひかなはぬたくひありけるのち
- 6 これをひく人よからす^③といふなをつ
- 7 けてうるさきま、にいまはおさ〜つ
- 8 たふる人なしとかいとくちをしき
- 9 ことにごそあれきむのねをはな

①ナシ 「参考」諸本「そのかみ」

②ナシ 「参考」諸本「物なれはにや」

③別

「参考」定大池榊陽肖三画「とか」定横「あひけむ」

六二丁オモテ (画三三六左) (大一一五八〜一一五九)

- 1 れては何事をかものをと、のへ
- 2 するしるへとはせむけによろつ
- 3 の事おとろふるさまはやすくな
- 4 りゆく世中にひとり^①いてはなれ

5 てもろこしこまとこのよにまとひ

6 ありきをやこをはなれむ事は

7 世中にひかめるものになりぬへ

8 しなとかなのめにて猶この道

9 をかよはししる^②かきりのはしをは

①ナシ 「参考」諸本「いてはなれて心をたて、」

②ナシ 「参考」諸本「はかり」

六二丁ウラ (画三七七右) (大一一五九)

- 1 しりをかさらむしらへひとつに^①て、
- 2 をひきつくさむことたにはかりも
- 3 なきもの^②なむなりいはむやおほ
- 4 くのしらへわつらはしき^③こゑおほ
- 5 かるを心にいりし^④さかりにはあり
- 6 とありこ、につたはりたるふといふ
- 7 もの、かきりをあまねくみあは
- 8 せて^⑤のちにはしとすへき人もなく
- 9 てなむ^⑥この道ならひしかと^⑦名あ

①ナシ 「参考」諸本「て」

②ナシ 「参考」画鳳^{画「なり」、その他諸本「な、り」}

③ナシ 「参考」定阿「こく」、画「こくの物」

④ナシ 「参考」画阿を除く諸本「さかりには世に」

玉里文庫本で「さかりにはありとありこゝにつたはりたるふといふもの、かきりを」を、阿里莫本は「さかりにはよきとありし身につたはりきたるかきりのふといふ物を」としている。

⑤定陽、定池「のち^には」

〔参考〕定肖「後^くには」、その他諸本「のち^くは」

⑥ナシ

〔参考〕定陽「このみをならひしかとも」、別阿「此みちならひしる

こと」、その他諸本「このみならひしかと」

⑦ナシ 〔参考〕諸本「猶」

六二丁オモテ (画三三七左) (大一一五九)

- 1 かりての人にはあたるへくもあら
- 2 しをやましてこの、ちといひて
- 3 はつたはるへきすゑもなきいと
- 4 あはれになむなどのたまえは大将
- 5 けにいとくちをしくはつかしとお
- 6 ほすこの御こたちの御中に思やうに
- 7 おいゝて給ふものし給は、そのよに
- 8 なむそもさまでなからへとまるやう
- 9 あらはいくはくならぬてのかきりも

六二丁ウラ (画三二八右) (大一一五九)

- 1 と、めたてまつるへき二の宮いま

2 よりけしきありて見え給をな

3 との給えはあかしの君はいとおもた、

4 しくなみたくみてきゝる給えり

5 女御の君はさうの御ことをはうゑ

6 にゆつり^①たてまつりきこえてよ

7 りふし給ぬれはあつま^②はおとゝの

8 御まえにまいりてけちかき御あそ

9 ひになりぬか^本つらきあそひたまふ

①ナシ 〔参考〕諸本ナシ

②ナシ 〔参考〕定榊「を^を」、その他諸本「を」

六三丁オモテ (画三二八左) (大一一五九、二一六〇)

- 1 ^①はつやかにおもしろしおとゝ、^②もをりかへ
- 2 し^③うたうたひ給御こゑたとえ
- 3 むかたなくあひきやうつきめてたし
- 4 月やう^④さしあかる^⑤程に花の色
- 5 かもてはやされてけにいと心にく
- 6 きほとなりさうのことは女御の御つ
- 7 まおとはいとらうたけになつかしく
- 8 は、君の御けはひくは、りて^⑥もの、
- 9 ねふかくいみしくすみてきこえつ

①ナシ 〔参考〕諸本「はなやかに」

玉里文庫本の「はつやかに」は意味不明。

②定陽別阿、定宵「へも」

「参考」その他諸本ナシ

③ナシ 「参考」諸本ナシ

④ナシ 「参考」諸本「まさに」

⑤ナシ 「参考」諸本「ゆのね」

六三丁ウラ (画三二九右) (大一一六〇)

- 1 るをこの御てつかひは又さまかは
- 2 りてゆる、かにおもしろくきく人た、
- 3 ならずす、ろはしきまで^①あひき
- 4 やうつきりむのてなとすへてさらに
- 5 いとかとある御ことのねなりかえりこ
- 6 ゑにみなしらへかはりてりちのかき
- 7 あはせともなつかしくいまめき
- 8 たるにきむは^{本に}こかのしらへあまた
- 9 のての中に心と、めてかならずひき

①定横榊池陽三河別「あい行つき」

「参考」定大肖「あひきやうつきて」

六四丁オモテ (画三二九左) (大一一六〇)

- 1 給へき五六のはちをいとおもしろく

2 すましてひき給さらに^①かたはなら

3 すいとよくすみてきこゆ春秋よろ

4 つの^②ものにもかよへるしらへにてか

5 よはしわたしつ、ひき給心しらひ

6 をしへきこへ給さまたかえすいとよ

7 くわきまえ給えるをいとうつくしく

8 おもた、しくおもひきこへ給この君

9 たちのいとうつくしくふきたて、

①ナシ 「参考」諸本「かたほ」

②ナシ 「参考」諸本「ものに」

六四丁ウラ (画三三〇右) (大一一六〇、一一六一)

- 1 せちに心いれたるをらうたかり給
- 2 てねふたくなりいたらむにこよひ
- 3 のあそひはなかくはあらてはつか
- 4 なる程にとおもひつるをと、めか
- 5 たきもの、ねとも^①にいつれともなき
- 6 をき、わく程のみ、とからぬたとく
- 7 しさにいたくふけにけり心な
- 8 きわさなりやとてさうのふゑふく
- 9 君にかわらけさし給て御そぬき

①ナシ 「参考」諸本「の」

六五丁オモテ(画三三〇左)(大一一六一)

- 1 てかけ給よこふゑの君にはこな
- 2 たよりおりもの、ほそなかには
- 3 かまなどことくしからぬさまにけし
- 4 きはかりにて大将の君には宮の
- 5 御方よりさかつきさしいて、宮の
- 6 御さうそくひとくたり^①かつけたて、
- 7 まつり給をおと、あやしやもの、
- 8 しをこそまつはものめかし給は
- 9 めうれはしき事なりとの給に宮

①ナシ 「参考」諸本「かつけたてまつり」

六五丁ウラ(画三三一右)(大一一六一)

- 1 のおはします御きちやうのそはよ
- 2 り御ふゑをたてまつるうちわら
- 3 ひ給てとり給いみしきこまふゑ
- 4 なりすこしふきならし給えは
- 5 みなたちいて給ほとに大将たちと
- 6 まり給て御このもち給えるふゑを
- 7 とりていみしくおもしろくふき
- 8 たて給えるかいとめてたくきこ
- 9 ゆれはいつれもくみな御てをはな

六六丁オモテ(画三三一左)(大一一六一)

- 1 れぬもの、つたへくいとになくのみ
- 2 あるにてそわか御さへの程ありかた
- 3 く^①おほししらる、大将殿は君た
- 4 ちを御車にのせて月のすめる
- 5 にまかて給道すからさうのことの
- 6 かはりていみしかりつるねもみ、に
- 7 つきてこひしくおほえ給わかきた
- 8 のかたはこおほ宮のをしへきこへ
- 9 給しかと心にもしめ給はさりし

①ナシ 「参考」諸本「おほししられける」

六六丁ウラ(画三三二右)(大一一六一～一二六二)

- 1 程にわかれ^①たてまつりにしかはゆ
- 2 る、かにもひきとり給はて^②おと、
- 3 きみの御まえにてはちてさら
- 4 にひき給はすなに事もた、を
- 5 ひらかにうちをほときたるさまし
- 6 て^③こともあつかひをいとまなくつきく
- 7 し給へはをかしきところもなく
- 8 おほゆさすかにはらあしくて物
- 9 ねたみうちしたるあひきやうつ

①ナシ 「参考」諸本「たてまつりたまひにしかは」

②ナシ 「参考」諸本「おとこ」

③定横神池陽三河^①別

「参考」定大肖「こともの」

九行目の傍記と同様のものは、河御七尾平大鳳国「し給も」河宮「し
たまふも又」別阿「し給へと」がある。

六七丁オモテ(画三三三左)(大一一六二)

1 きてうつくしき人さまにぞも

2 のし給める※院はたいえわたり給

3 ぬうへはとまり給て宮^①も御物かたり

4 なときこへ給てあかつきにそわたり

5 給える日^②たかくなるまで御とのこも

6 れり宮の御ことのねはいと^③うるせく

7 なりにけりないかき、給しと

8 ^④きこへ給えはしめつかたあなたにて

9 ほのき、しはいかにそやありしを

①ナシ

「参考」定横神池陽三河^①別「に」、定大「にも」

②定横池 「参考」その他諸本「たかう」

③定神三河保、定池「うるさく」

「参考」その他諸本「うるさく」

④ナシ 「参考」諸本「きこえ給へは」

この箇所、玉里文庫本では敬語表現に違和感がある。源氏が紫上
に対して、自身に「きこゆ」という語を使用するという点が不審。

※二行目の「／」は合点か。

六七丁ウラ(画三三三右)(大一一六二)

1 いとよなくなりけりいかてかは

2 かくことくなくをしへきこへ給はむ

3 にはといらへきこへ給さかしてをとるく

4 おほつかなからぬもの、し^①なりし

5 ^②これにかれにもうるさくわつらはし

6 くていとま入わさなれはをしへた

7 てまつらぬを院にも内にもきむ

8 はざりともならはしきこゆらむ

9 との給ときくかいとをしくさりとも

①ナシ 「参考」諸本「なりかし」

②ナシ 「参考」諸本「これかれにも」

六八丁オモテ(画三三三左)(大一一六二)

1 さはかりのことをたにかくとりわき

2 て御うしろみにとあつけ給えるしる

3 しにはとおもひをこしてなむ

4 なときこへ給ついでにもむかしよ

- 5 つかぬ程をあつかひおもひしさまそ
- 6 のよには^①いとまなくて心のとかにと
- 7 りわきてをしへきこゆる事なども
- 8 なくちかきよにもなにとなくつきく
- 9 まされつ、すくしてき、あつか

①ナシ 「参考」諸本「いとまもありかたくて」

この箇所、表現は違うものの、意味は同じである。源氏は、紫上が小さい頃に時間がなくて琴を教えられなかったとする場面である。

六八丁ウラ (画三三四右) (大一一六二～一一六三)

- 1 はぬ御ことのねのいてはへしたりし
- 2 もめむほくありて大将のいたくか
- 3 たふきおとろきたりしけしき
- 4 もおもふやうにうれしくこそあり
- 5 しかなどきこへ給かやうのすちも
- 6 いまはまた^①をとなくしく宮たち
- 7 の^②御つかひもとりもちてし給さまも
- 8 いたらぬことなくすへて何事に
- 9 つけてももとかしくたとくしき

①ナシ

「参考」**定**権「をへとなくしう」**別**阿「おとなくしきかたに」

その他諸本「をとなくしく」

②ナシ 「参考」諸本「あつかひなど」

六九丁オモテ (画三三四左) (大一一六三)

- 1 事ましらすありかたき人の^①御さ
- 2 まなれといと^②かうしぬる人はよに
- 3 ひしらぬ^③ためしもあむなるをと
- 4 ゆ、しきまておもひきこへ給さまく
- 5 なる人のありさまを見あつめ^④給
- 6 ま、にたくひあらしとのみおも
- 7 ひきこへ給へりことしは三十七に
- 8 そなりたまふみたてまつり給し
- 9 とし時月の事などもあはれに^⑤

①ナシ 「参考」諸本「御ありさまなれは」

②ナシ

「参考」**別**阿「かうしもあまりくしぬる」、その他諸本「かくくしぬる」

本文は違うものの、紫上が諸々備わっている人とするか、直前を指して「かうしぬる」とするかの違いのみである。

③ナシ 「参考」諸本「ひさしからぬ」

諸本の「世に久しからぬ」とは違う本文だが、玉里文庫本の「ひしらぬ」は「日知らぬ」と解し、「久しからぬ」と同等の意味であると捉えることができよう。

④ナシ

この箇所は異同が多い。玉里文庫本に比較的近いのは、定陽「たまふまゝにはまことに」である。定横「たまふまゝにとりあつめ」定池「たまふまゝにとりあつめたらひたることはまことに」、河宮「たまふまゝにとりあつめたらひたることはまことに」、その他諸本「たまふまゝにとりあつめたらひたることはまことに」。なお、別阿はこの前後の文も含めてナシ。阿里莫本以外は、異同はあるものの、文意に大きな差はない。

⑤ナシ 「参考」諸本「年月」

六九丁ウラ (画三三五右) (大一一六三)

- 1 おほしいてたるついでにさるへき
- 2 御いのりなとつねよりもとりわきて
- 3 ことしはつ、しみ給へものさはかし
- 4 くのみありておもひいたらぬこと
- 5 もあらむをなをおほしめくら
- 6 しておほきなること、もし給は、
- 7 おのつからせさせてむこそうつの
- 8 ものし給はすなりにたるこそ
- 9 ^①とくちをしけれおほかたにてう

①ナシ 「参考」諸本「いと」

玉里文庫本のように「と」としてしまうと、その直前で源氏の発話がか切れてしまう。しかし、「と」の下の「くちをしけれ」は、明らかに「こそ」を受けての已然形になっていることや、会話の内容が

続いていると見る方が自然であることから、この箇所の当該本の本文は不審である。

七〇丁オモチ (画三三五左) (大一一六三〜一一六四)

- 1 ち^①たのまむともいとかしこかりし
- 2 人をなと^②の給ひつみつからはをさな
- 3 くより人にことなるさまにてことく
- 4 しく^③おもひいて、いまの世のお
- 5 ほえありさまきしかたにたくひ
- 6 すくなくなむありけるされとまた
- 7 よにすくれてかなしきめをみ
- 8 るかたも人にはまさりけりかし
- 9 まつはおもふ人にさまくをくれのこ

①ナシ

「参考」定横池三河宮「たのむにも」別阿「頼むも」その他諸本「たのまむにも」

②別阿

「参考」定横「のたまふいつ」その他諸本「のたまひ いつ」

③ナシ

「参考」定大「おいゆて、」定池「おひいてへて」河「おい、て」その他諸本「おいいて、」

諸本では、源氏の成長過程において「ことごとし」が使用されているが、玉里文庫本では、現在に至るまでの過程で世の人々が源氏を

「ことごとしく」思い起こしている」と解釈することができる。

七〇丁ウラ (画三三六右) (大一一六四)

- 1 りとまれるよはひのすゑにもあ
- 2 かすかなしとおもふ事おほくあ
- 3 ちきなくさるましき事につけて
- 4 も^①あやうくものおもはしく心に
- 5 あかすおほゆる事そひたる身
- 6 にてすきぬれはそれにかえて
- 7 やおもひし程よりはいまゝて
- 8 も^②なからふるなとなむおもひしらる
- 9 る君の御身にはかのひとふしの

①ナシ 「参考」諸本「あやしく」

②ナシ 「参考」諸本「なからふるならむと」

七二丁オモテ (画三三六左) (大一一六四)

- 1 わかれよりあなたこなたものおもひ
- 2 とて心みたり給はかりのことあら
- 3 しとなむおもふきさきといひまし
- 4 てそれよりつきくはやむ事な
- 5 き人といえとみなかならずやすからぬ
- 6 ものおもひそわさなりたかきま

- 7 しらひにつけても心みたれ人に
- 8 あらそふおもひのたえぬもやすけ
- 9 なき^①をやのまこのうちながら^②すこ

①ナシ

②定禰 「参考」圓保「おほやけ」その他諸本「ををや」

②定禰

「参考」圓大「すくし給つる」圓阿「すくいたてまつることの」その他諸本「すくしたまへる」

七二丁ウラ (画三三七右) (大一一六四)

- 1 し給えるやうなる心やすき事は
- 2 なしそのかたは人にすくれたり
- 3 けるすくせとはおほししるやおも
- 4 ひのほかはこの宮のかくわたりも
- 5 のし給えるこそはなまくるしか
- 6 るへけれどそれにつけてはいと、
- 7 くはふる心さしの程^①は御みつから
- 8 のうへなれはおほししらすやあら
- 9 むもの、心もふかくしり給ふめれ

①ナシ 「参考」諸本「を」

七三丁オモテ (画三三七左) (大一一六四〜一一六五)

- 1 はざりともとなむおもふときこそ給
- 2 えはのたまふやうにものはかなき
- 3 身にはすきにたるよそのおほ
- 4 えはあらめところにてたえぬものな
- 5 けかしさのみうちそふやさはみつ
- 6 からのいのりなりけるとでのこり
- 7 おほけなるけはひはつかしけな
- 8 りまめやかにはいとゆくさきすくな
- 9 き心ちするをことしもかくしらす

七三丁ウラ (画三三八右) (大一一六五)

- 1 かほにてすすくすはいとうしろめ
- 2 たくこそさきくもきこゆる事
- 3 いかて御ゆるしあらはときこへ給そ
- 4 れはしもあるましきことにな
- 5 むさてかけはなれ給なむよにのこ
- 6 りてはなにのかひかあらむた、
- 7 かくなにとなくてすくる年月な
- 8 れとあけくれのへたてなきう
- 9 れしさのみこそます事なく

七三丁オモテ (画三三八左) (大一一六五)

- 1 おほゆれなを^①おもふさまなる心の
- 2 程をみはて給へとのみきこへ給を
- 3 れいの事と心やましくてなみた
- 4 くみ給へるけしきをいとあはれ
- 5 ^②とみたてまつり給てよろつにき
- 6 こへまきはらし給^③おほえはあらね
- 7 と人のありさまのとりくにくちを
- 8 しくはあらぬをみしりゆく
- 9 まゝにまことのこゝろはせをひらかにお

①ナシ

「参考」^④阿「をのつから思ふさまある」その他諸本「おもふさま
ことなる」

②^定横神池陽肖三^画阿

「参考」^定大「に」

③ナシ 「参考」諸本「おほく」

諸本の「おほくはあらねど」は、「それほどたくさん女性の性を知つ
ているわけではないが」となる。一方、「おほえはあらねど」は、「思
い当たるふしはないのだが」と、紫上の手前、気を遣う源氏の姿が
浮かび上がる。

七三丁ウラ (画三三九右) (大一一六五)

- 1 ちいたるこそいとかたきわさなり

- 2 けれどなむおもひはてにたる大将
- 3 のは、君をおさなかりし程に見
- 4 そめてやむことなく^①えならぬすち
- 5 にはおもひしをつねに中よから
- 6 すへたてある心ちしてやみにし
- 7 こそいまおもへは^②いとくちをしく、や
- 8 しくもあれまたわかあやまちに
- 9 のみもあらさりけりなと心ひとつに

①ナシ 「参考」諸本「えさらぬ」

この箇所は、新編日本古典文学全集の本文で「え避らぬ」とされる。葵上を「おろそかにできない」という内容になる。玉里文庫本の「えならぬ」は、「並大抵ではない」という意味があるため、葵上が「身分が高く並大抵ではなく思っていた」という意味になるう。

②ナシ

「参考」**〔定〕**「いとをしようも」**〔阿〕**「いとをしくも」**〔別阿〕**「いとおしくも」**〔その他諸本〕**「いとおしく」

七四丁オモテ（画三三九左）（大一一六五～一一六六）

- 1 なむおもひいつるうはしくおも
- 2 りかにてそのことあかぬかなとな
- 3 とおほゆる事もなかりきた、いと
- 4 あまりみたれたるところなくす
- 5 くくしくすこしさかしとやいふへか

- 6 りけむとおもふにはたのもしくみる
- 7 にはわつらはしかりし人さまにな
- 8 む中宮の御は、みやすところなむ
- 9 さまことに心ふかくなまめかしき

七四丁ウラ（画三四〇右）（大一一六六）

- 1 ためしには^①おもひいてらるれと
- 2 人みえにくくくるしかりし^②御さまに
- 3 なむありしうらむへき^③ふしこ
- 4 そげにことほりとおほゆるふしを
- 5 やかて^④なからへおもひつめてふかく
- 6 えむせられしこそ^⑤くるしかりし
- 7 か^⑥心ゆるひまなくはつかしくて我も
- 8 人もうちたゆみ^⑦あさゆふむつる
- 9 をかさむにはいとつ、ましき所の

①ナシ 「参考」諸本「まつ思ひいてらるれと」

②ナシ

「参考」**〔定〕**池「へさま」**〔定〕**宵**〔別〕**保「心さま」**〔その他諸本〕**「さま」

③ナシ

「参考」**〔定〕**宵「ふへし」**〔阿〕**別保「ふしは」**〔その他諸本〕**「ふしそ」

④ナシ 「参考」諸本「なかく」

⑤ナシ 「参考」諸本「いとくるしかりしか」

⑥ナシ 「参考」諸本「心ゆるひなく」

⑦ナシ 「参考」 諸本「あさゆふのむつひをかはさん」

諸本では「睦びを交はさん」となっている箇所が玉里文庫本では「むつるをかさむ」となっている。これは、「睦るを嵩む」と読む可能性はあるが、文法的に不審な点がある。

七五丁オモテ (画三四〇左) (大一一六六)

- 1 ありしかはうちとけては見おと
- 2 さる、ことやなとあまりつくろひ
- 3 し程にやかてへた、りしなか
- 4 そかしいとあるましき名をたち
- 5 て^①あはくしくなりぬるなけきを
- 6 いみしくおもひしめ給えりしか
- 7 いとをしくけに人からおもひ
- 8 しもわれつみある心ちしてやみ
- 9 にしなくさめに中宮をかくさるへ

①ナシ 「参考」 諸本「身のあはくしく」

七五丁ウラ (画三四一右) (大一一六六、一一六七)

- 1 き御ちきりとはいひなからとりたて
- 2 て世のそしり人のうらみをも
- 3 しらす心よせたてまつるをか
- 4 のよなからもみなおされぬらむい

- 5 まもむかしもなをさりなる心の
- 6 すさひにいとをしく、やしきこ
- 7 ともおほくなむときしかたの人の
- 8 御うゑすこしつゝのたまひいて、
- 9 うちの御かたの御うしろみはなに

七六丁オモテ (画三四一左) (大一一六七)

- 1 はかりのほとならずとあなつりそ
- 2 めて心やすきものにおもひしを
- 3 なを心のそこみえすきはなくふか
- 4 きところある人になむうはへは人
- 5 になひきおいらかにもえなからうちと
- 6 けぬけしきしたにこもりてそ
- 7 こはかとなくはつかしきところこ
- 8 そあれとのたまえは^①こと人はしら
- 9 ぬをこれは^②まほらねとおのつから

①ナシ

「参考」定池「こと人はみえねは」、その他諸本「こと人はみねは」

②ナシ

「参考」定櫛「まをならねと」定横池「まほならねとも」その他諸本「まほならねと」

この箇所、諸本の「まほならねと」は「正式に対面する」の意味になる。一方、玉里文庫本の「まほらねと」は「目守らねど」と解釈

すれば、「じつくり見たことはないが」という意味になる。

七六丁ウラ(画三四二右)(大一一六七)

- 1 けしきみるをりくもあるにいと
- 2 うちとけにく、心はつかしきあり
- 3 さましるきをいとたとしへなきう
- 4 らなさをい^①か、み給らむとつ、まし
- 5 けれと女御はおのつからおほし
- 6 ゆるすらむとのみおもひてなむと
- 7 の給さはかりめさましと心をき
- 8 給えりし人を^②けふはかくゆる
- 9 してみえかはしなとし給も女御

①ナシ 「参考」諸本「いかに」

②ナシ 「参考」諸本「いまは」

七七丁オモテ(画三四二左)(大一一六七)

- 1 の御ためのま心なるあまりそ
- 2 かしとおほすにいとありかたけれ
- 3 は君こそはさすかに^①くまなき
- 4 はあらぬものから^②人よりことにいと
- 5 よくふたすちに心つかひはし
- 6 給ひけれさらにこゝらみれと御あり

- 7 さまに、たる人はなかりけりいと
- 8 けしきこそものし給えとほ、ゑみ
- 9 てきこへ給^{*}／宮にいとよく^③ひき給え

①ナシ 「参考」諸本「くまなきには」

②ナシ

「参考」^{〔定大〕}「人により〔事に〕したかひ」、^{〔定陽旨阿〕}「人により事にしたかひて」、^{〔阿阿〕}「人より事にしたかひ」、その他諸本「人により事にしたかひ」

③ナシ 「参考」諸本「ひきとり」

※九行目の「／」は合点か。

七七丁ウラ(画三四三右)(大一一六七～一一六九)

- 1 りしことよろこひきこえむ^①と
- 2 ゆふつかたわたり給ぬわれに心を
- 3 く人やあらむともおほした、す
- 4 いといたくわかひて^{*}わたり給える
- 5 にいとくるしけにておはす^{*}いかな
- 6 る御心ちそとてさくりたてまつ
- 7 り給えはいとあつくおはすれば
- 8 昨日きこへ給ひし御つ、しみの
- 9 すちなと^②おほしあはせていと

①ナシ 「参考」諸本「とて」

②ナシ

〔参考〕定池「おほしあはせ（給）て」その他諸本「おほしあはせ給て」

※四、五行目に何らかの記号がある。この箇所は、『源氏物語大成』の一一六七頁一四行目から一一六八頁一四行目までに該当する長大な脱文があるため、それを示しているか。

七八丁オモテ (画三四三左) (大一一六九)

- 1 おそろしくおほさる御かゆなとこ
- 2 なたにまいらせたれと御覧しも
- 3 いれすひ、とひそひをはしてよろ
- 4 つにみたてまつりなけき給は
- 5 かなき御くたものをたにいとものう
- 6 くし給ておきあかり給事たえ
- 7 て日ころへぬいかならむとおほしさ
- 8 はきて御いのりともかすしらす
- 9 はしめさせ給ふ僧めして御かち

七八丁ウラ (画三四四右) (大一一六九)

- 1 などせさせ給ふそこところともなく
- 2 いみしくくるしくし給てむね
- 3 はときくおこりつ、わつらひ給ふさ
- 4 またへかたくくるしけなりさまく

5 の御つ、しみかきりなけれと

6 しるしもみえすおもしろとみれと

7 ^①をこたるけちめ^②あるはたのもし

8 きを^③いみしう心ほそくかなしと

9 みたてまつり給に^④ことくしく

①定陽別阿、定池「をのわかゆおこたる」

〔参考〕その他諸本「をのつからおこたる」

②定横榊池陽肖三阿別

〔参考〕定大「あらは」

③ナシ 〔参考〕諸本「いみしく」

④ナシ 〔参考〕諸本「ことく」

この箇所は、源氏が紫上の病氣のために諸事にまで気が回らないとするのが諸本の「ことくおほされねば」である。一方、玉里文庫本は源氏が紫上の病氣を「ことくしくおほされねば」なので、仰々しくは思っていないということになってしまい、後文に内容が続かなくなってしまう。

七九丁オモテ (画三四四左) (大一一六九)

- 1 おほされねは^①御^本かむのひ、きも
- 2 しつまりぬかの院よりもかくわ
- 3 つらひ給よしきこしめして御
- 4 とふらひいとねむころにたひくき
- 5 こへ給をなしさまにて二月もす

- 6 きぬいふかきりなく^②おほしなけき
- 7 心みに所をかえ給はむとて二条院
- 8 にわたしたてまつり給つ院の
- 9 うち^③ゆすりておもひなけく人おほ

①ナシ 「参考」諸本「御賀」

玉里文庫本は「本に」と傍記があるように、この箇所本文を不審としてゐることがわかる。

②ナシ

「参考」**別阿**「おほしきはきて」その他諸本「おほしなけて」

③ナシ 「参考」諸本「ゆすりみちて」

七九丁ウラ(画三四五右)(六一一六九～一一七〇)

- 1 かり冷泉院もきこしめしなけ
- 2 くこの人うせ給は、院もかならず世
- 3 をそむく御ほい^①とけ給はむと大将
- 4 の君なども心をつくしてみたて
- 5 まつり^②あつかひ給御すほうなど
- 6 はおほかたのをはさるものにて
- 7 とりわきてつかうまつらせ給い
- 8 さ、かものおほしわくひまにはきこ
- 9 ゆることをさも心うくとのみうら

①ナシ

「参考」**別阿**「とけ給なん」その他諸本「とけたまひてむ」
 ②**阿**「参考」その他諸本「あつかひ給て」

八〇丁オモテ(画三四五左)(六一一七〇)

- 1 みきこへ給えとかきりありてわか
- 2 れはて給はむよりもめのまへ
- 3 にわか心とやつしすて給はむ御
- 4 ありさまをみてはさらに^①とき給
- 5 ましくのみをしくかなしかるへけ
- 6 れはむかしよりみつから^②こそかゝる
- 7 ほうふかきをとまりてさうくしく
- 8 おほされむ心くるしさにひかれ
- 9 つ、すくすをさかさまにうちすて

①ナシ

「参考」**別保**「かた時あるましく」その他諸本「かた時たふましく」この箇所は、紫上が出家してしまつたならば、源氏が「片時も耐えられない」と考へている箇所である。玉里文庫本の本文では「解き給ふまじく」と解釈できるため、「安心のなさりようがない」となるか。

②**定横池河大別阿**

「参考」その他諸本「みつからそ」

八〇丁ウラ (画三四六右) (大一一七〇)

- 1 給はむとやおほすとのみをしみき
- 2 こへ給に^①いとたのみかたけによはり
- 3 つ、かきりのさまにみえ給ふをりく
- 4 おほかるをいかさまにせむとおほ
- 5 しまとひつ、宮の御かたにもあから
- 6 さまに^②もわたり給はず^③御ことも
- 7 すさましくて^④みな(「ひ」)きこめれたり人々はへる(二てう)ひきめられ院
- 8 につとひまいりてこの院には火
- 9 をけちたるやうにてた、女とちをは

① 阿大

〔参考〕その他諸本「けにいと」。阿はこの箇所も含めて大幅な異同があるため、この限りではない。

② 阿保

〔参考〕その他諸本ナシ

③ ナシ

〔参考〕定横神池陽「御こと、も」、阿阿「御琴とも、」その他諸本「御こと、も」

④ ナシ

〔参考〕定大横神肖三「みなひきこめられ院のうちの人々はみなあるかきり二条院」定池「本ひきこめられ院のうちの人々はみなあるかきり二条院」定陽「ひきこめられ院のうちの人々はみなあるかきり二条院」阿七宮尾平大鳳国「みなひきこめられにたり院のうちの人々はみなあるかきり二条院」

〔御〕「みなひきこめられにたり院のうちの人々はみなあるかきり二条院」〔阿〕「ひきこめられにたり院のうちの人々はみなあるかきり二条院」〔阿保〕「みなひきこめられにたり院のうちの人々はみなあるかきり二条院」

四一〜八〇丁までの本帖の本文の特徴

玉里文庫本には、他諸本では句点が付けられる箇所ながら、切れずに次に続くという本文がある。これらは解釈に違いは出ない。一〜四〇丁までには、このような本文が4箇所あったが、四一〜八〇丁までの範囲には一か所のみある。五一丁ウラにおいて、玉里文庫本で「御こともをしやりてけうそくにをしかりさ、やかになよひか、り給えるに」としている箇所の傍線部の本文は、その他の本文では、「をしかり給へる」「をしかりよりぬ給へる」「をしかり給へり」と句点を付して読むようになっていく。

また、五九丁オモテには「そのたちふかき人のいまのよにおさくなければ」という本文がある。「たち」の箇所は、他の本文では、「をとり」「たとり」となっている。玉里文庫本の「たち」は「性質」の字を充ててしまうと、近世以後にならないと出てこない用法となってしまう。そのため、ここでは「多智」と取り、「その道の智慧が深い人はなかなかいない」という解釈をする。「多智」の初例は一三世紀後半であることから、書写年代を考える際の手がかりとなろう。

さらに、四二丁ウラには、「こなたに」という傍記があるが、「このかた」という本文は現在確認できる諸本にはない。もし、同様の本文を持つ諸本が出てきた場合には、玉里文庫本との関わりがある可能性

があるといえよう。

【補記】

・本稿は、JSPS 科研費21K00319の助成を受けたものである。

・本稿を執筆するにあたり、翻刻は次のように分担した。

四一～六〇丁 武藤 那賀子

六一～八〇丁 富澤 萌未

なお、異同の確認および考察は右記の二名で行なった。



注

一 鹿児島大学付属図書館の玉里文庫には、『源氏物語』が二セットある。本稿で扱うのは、一五帖のみのもので箱に「古筆源氏物語」とあるものである。

二 徳光澄雄「鹿児島大学付属図書館蔵 玉里文庫本古筆源氏物語について」『語文研究』二三号、一九六七年四月

三 『源氏物語』原本データベース（二〇二一年一月四日一六時〇〇分閲覧）
http://base1.nijl.ac.jp/view/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0091-027603&IMG_SIZE=&PROC_TYPE=null&SHOMEI=%E3%80%90%E6%BA%90%E6%B0%8F%E7%89%A9%E8%A9%E3%80%91&REQUEST_MARK=null&OWNER=null&BID=null&IMG_NO=1

四 武藤那賀子「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学付属図書館蔵）再考（一）」（『国際文化学部論集』第一九巻二号、二〇一八年一〇月）および「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学付属図書館蔵）再考（二）」（『国際文化学部論集』第一九巻三号、二〇一八年二月）。

五 一～四〇丁の翻刻と考察については、武藤那賀子・富澤萌未「玉里文庫本『古筆源氏物語』『若菜下』巻・第一～四〇丁の翻刻と考察」（『国際文化学部論集』巻三号、二〇二一年二月）に掲載してある。

六 徳光論では、「若菜下」巻を定家本系本文としている。

七 異同の確認には、池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社）を使用した。また、諸本を示す漢字一字もこれに従った。